

障害理解促進事業の今後の方向性について

障害福祉課

今後の方向性（案）

人を集めのではなく、人のいる場所へ出向き、理解促進を図ります

- 障害者週間に開催するパラスポーツに関するイベントの実施を見送り、多数の参加者が見込まれるイベント等の活用を検討します。
- 市内小中学校や高校等や市内企業との連携を図り、理解促進事業を実施します。
- 当事者の声を知ることができる情報発信を進めます。

令和3年度～令和6年度の実績（障害者週間イベント）

例年、12月の第1土曜日に志津コミュニティセンターで実施。パラリンピック出場選手の講演やパラスポーツの体験を通して、障害理解の促進を図るイベント。

■ 参加人数の少なさ（特に若年層）が課題

- 〈R3〉 120人（コロナ禍につき先着150名）→〈R4〉 134人→〈R5〉 122人→〈R6〉 117人
- 佐倉・産業大博覧会 2024（R6.11/9・10開催）は約7,000人の参加者
- 笑顔deつながるふくしふェスタ（R6.11/16開催）は約1,300人の参加者（佐倉市後援事業）

理解促進事業の具体例として…

- 産業大博覧会などのイベントで車いす体験やパラスポーツの体験ブースを設置
- 様々な視点から障害理解の促進を図ることができる「障害福祉教育プログラム（仮称）」を準備し、小中学校や高校等に提案します。
(例) □パラリンピック出場選手の講演
 - VRで発達障害の特性を体験
 - 福祉事業所での仕事体験 など
- 市内企業などへ出前講座などを実施します。
- パラリンピック出場選手や障害のあるアーティストのインタビューをはじめ、当事者の声を知ることができるホームページの充実やパネル展示などを進めます。

各部会からの意見（抜粋）

【会場・集客】

- オリオンハウスがイオンタウンでイベントを行った際、たまたま来ていた人も内容を見ててくれた。規模にもよるが、開催規模により広さ等検討の余地がある。
- 一般の人も体験できるような、集客の目玉のイベントが必要。

【他のイベントに参加】

- 産業大博覧会のように、飲食ブースを設ければ人を引き付けるのではないか。
- 来場者数については、単体で障害者のイベントを行うのは難しくなっているのではないかと思う。福祉フェスタや他の大きなイベントに加わって行うという形はどうか。
- パラスポーツのイベントを始めた時は東京パラの年だったので、関心が高かった。その後は、事業所や当事者家族等、当事者の来場が中心になった印象。大きなイベントに加わる形の方が、様々な人に啓発が行えるのではないか。

【内容】

- ボッチャの市長杯みたいな大会形式にして、ボッチャの景品等を渡すのはどうか。
- また、ワークショップ（子どもが何か作れるスペース）を設けてみてはどうか。
- VRがとてもよかったです。福祉に携わっている人だけではなく、もっと充実させていくはどうか。スタンプラリーは子どもに人気があったので、また実施しても良いと思う。
- 今後もボッチャ一本でやっていくのは難しいのではないか。
- 小中学校の吹奏楽部、合唱部を呼べば、保護者も来る。
- 障害者作品展は、アート好きの方も来ている。
- 車椅子に乗ったり、マスクをしたり、イヤーマフをしたり、松葉杖を使う等で街に出てみる。
- 会場近くの事業所の「見学会」を行ってもらう。